

## 西高サッカー部の成り立ちについて

十中7期 土岐 高史

私は、残念なことに十中蹴球部の成立には関与していない。それだけに、どういういきさつで十中（現西高）に蹴球部が出来たのか大変興味がある。

私は、西高の前身都立十中に昭和18年（1943年）に入学し、20年の7月に岐阜に疎開し、昭和22年（1947年）の4月に5年生として十中に復帰した。中学の1～2年の頃、グライダーに熱中し、あの狭い校庭をぎりぎりまで使って飛んでいたものである。戦後、日本の空を飛ぶことが一切禁止され、学校に戻った時、講堂の脇にグライダーの翼がもの悲しげに置かれていたのを覚えている。

そんな折、昔のグライダー仲間、家も近所だった今は亡き片山不二臣君が、「おい、サッカーをやらないか」と声をかけてくれた。何かやりたくてうずうずしていた私は、早速仲間に入ってボールを蹴り始めた。一緒にやっているメンバーを見ると、内野孝治君、中川桂次君、秋岡武承君それに本領泰弘君など昔グライダーをやっていた連中が多かったので、てっきりグライダー部でサッカーをやることにしたと思っていた。

50年誌の編集に当たって昔の仲間に色々聞いたところ、どうもそうではなくて、サッカー部のルーツは上島周蔵先生とこれも今は亡い関彦太君のようである。

上島先生については、関昭五君が先生と文通があり、先生に手紙を出して当時のことを思い出してもらってくれた。先生からの返事によると、昔のことは良く覚えていないとされながらも、要約すると次のようなことになるようだ。

先生は、昭和20年の3月に松本五十連隊に召集され、中学の配属将校になり、外地出動近しと云われていた最中に終戦になり、その年の10月に十中に復帰された。一方、先生は松本の中学で6年間蹴球部の部長をなさっており、戦後十中にもサッカーを導入しようと考えられたようだ。先生によると当時学校には蹴球（当時はア式蹴球－association football）をやった職員がいなくて、御自分で体育の平山先生に頼んでボールを出して貰い、同好の生徒の集まりを期待されたようである。そして、先生は昭和22年の6月長野県の校長となり、離任されている。

一方、関彦太君については、4年生の時に神戸から転校してきたとのことで、既にサッカーの経験があり、上島先生に勧められてサッカーを始めたのであろう。技術的にも人間的にも彼はキャプテンとして十分な資質を持っており、その後サッカー部の主将として皆をひっぱつてゆくことになる。

中川君によれば、十中4年（昭和21年）の秋の運動会で、先生チームと練習試合を行い、2－0で惜敗したとのこと、これがチーム結成後初めての試合であったようだ。サッカーシューズ等無く、運動靴か裸足だったようである（写真参照）。

そして5年になると、リーグ戦に参加し、大泉中と対戦し負けたとある。従って、サッカー

部として対外活動を始めたのは、昭和22年4月以降と考えて良いようである。

以上のような次第で、創立記念日のようなものは存在せず、昭和22年4月に西高（十中）サッカー部が発足したとするのが適当なような気がする。

今から思うと不思議でしょうがないが、当時はボールを蹴ることが無性に楽しく、兎に角放課後球が見えなくなるまで、蹴っていたことを思い出す。球も配給で中々手に入らず穴が開くと別の球の革で塞ぎ、破れた革を又繕って、凸凹になるまで蹴っていた。靴も無いので、裸足で蹴る勇敢な奴もいた。おなかが空くと、校庭の手洗い場で水を腹一杯飲んで腹をふくらましてまた蹴ったものである。

私は、昭和23年の4月東京高校に進学したが、中川君によると、この年東京都サッカーリーグ戦3部Aで優勝している。戦績は次の通りである。

十 高	1	-	0	明治学院	同	5	-	0	青山学院
同	5	-	0	世田谷工業	同	不戦勝			成蹊学園
同	2	-	1	都立三商					

この結果、次年度は2部に昇格している。



優勝記念写真 昭和23年11月22日撮影

リーグ優勝には、主将として活躍した関彦太君の力が与っているようだ。主将としてチームをまとめ、練習計画、部費の増額などに気を使い、全員の信頼を集め、機知とユーモアに富み、明るいサッカー部を作ったという。彼がCH（センターハーフ）としてバックにでんとして控えていると片山君や中川君のフォワードはアタックに専念出来たという。

私は、秋岡君と一緒に東京高校でもサッカー部に入り、部活動をしたが、その時のキャプテンの黒田尚次さんに頼んで、十高サッカー部の指導をしてもらった。そのへんの事情は、寺田格郎君の「草創期の合宿」に詳しい。

## サッカーから学んだこと

十中7期 土岐 高史

戦争が終わった時、私は中学の3年生だった。その年の東京最後の大空襲の日（昭和20年5月27日）、宿直で当時の十中に泊っていた。頭の上をB-29の編隊が、西から東へと飛んで行く。高射砲弾がさく裂し、日本の戦闘機が迫って行くが、びくともしなかった。その内に東の空が真っ赤になった。夜が明けて家に帰ろうとしたが、道路は焼け落ちた建物で歩けない。井の頭線の線路の上を渋谷に向かって歩いた。途中永福町の車庫に来ると、車庫に入っていた電車が全部燃えてしまっていた。集中して焼夷弾を落としたのだろう。実に正確な爆撃だった。家に帰ると隣の家まで焼けていたが、私の家は残っていた。風向きが変わって火の手が北へ廻ったのだそうである。庭に焼夷弾が2発落ちて燃えた跡があった。これでは駄目だと急遽両親の田舎の岐阜に疎開した。落ち着いたのは、岐阜市の郊外だったが、着いた直後に岐阜市が全滅してしまった。

こんな世の中だったので、中学の思い出に勉強のことは殆ど無い。勤労働員で農家に芋掘りに行き、御馳走になった白米の握り飯の甘い味、日本無線の潜水艦のレーダー用の真空管工場体験した機銃掃射。真空管の合格率が100個に1個ではとても勝てるとは思えなかった。

学校での思い出と云うと、1、2年の時のグライダー部の活動、そして疎開から帰って5年の時の蹴球部の活動、どちらも教室とは無関係なグラウンドでのことである。そして何故かサッカーをやった人は、グライダー部の出身者が多かった。似ているのはどちらも体力の限界まで消耗するスポーツだと云うことだろうか。そして内容は随分異なるが、どちらもある種のチームプレイが必要なのである。グライダーは、一人の人を空に飛ばすのに残りの人が力の限りゴムのロープを引かなければならない。ちょっとでも力を抜くと大変なことになる。サッカーでは、一つの球を相手のゴールに入れるのに全員が協力する。この時、一人一人の選手は自分の行動を、全体を見ての判断から自分で決めなければならない。これらの経験が私のその後の人生にかなりの影響を与えているような気がする。

それに、敗戦の前後は、先生達も生きるのに精一杯で、授業に力が入らなかったのは当然だと思う。その様子を見て、生徒達は先生を当てにせず、自分で何事も決めて行動しなければならないと思ったのではないだろうか。私には、恐縮だが先生についての思い出は殆ど無い。5年生から旧制の高校に入ったのだが、進学先も勝手に自分で決めて受験したような気がする。その高校で1年経ったら、新制大学と合併するという。中身（学生）も一緒だと思っていたら、試験を受けると云われ、見事に落ちてしまった。そこで、8月迄アルバイトで資金を稼ぎ、9月から予備校に通った。何しろ自分で稼いだ金だ。もったいないから、教室の一番前で先生の言うことを残らず吸収しようと頑張った。そこでの模擬試験がそっくり試験に出て、大学に入学することが出来た。

こんな経験から人に頼ることが下手で、就職も先輩の居ないことを確かめて試験を受けた。

その後、自分のやりたいことはどこまでも追求する癖がついて、うまく行ったこともあるし、人に迷惑を掛けたことも再三あったようだ。定年で社会から離れた今になって、自分では満足している。

5年生の時のサッカーは、対外試合もやったが、記憶に残っているのは、放課後、日が暮れてボールが見えなくなるまで蹴ったことである。腹が減ると、水飲み場で腹一杯水を飲んで、空腹を紛らわし練習を続けた。

そんなことで会社に入った時、サッカーボールを買ってきて、空き地で蹴っていたら、段々仲間が増えて、いつの間にかチームが出来て、江東区のサッカー連盟に入って試合をした。その後会社を変わったが、そこでも同様な順でチームが出来て、相手を見つけては試合をした。

西高サッカー部との関係では、正月の現役-OB戦に何度か出た覚えがあるが、その他のことは、私より寺田会長の方がよっぽど詳しい。何れにせよ、私と西高との関係はサッカー部以外には殆ど無いのである。

## 思い出

西高1期 関 昭五

西高サッカー部が創部してから、はや50年が経過したという。この記念すべき50周年に当り、なにか思い出を書くことになった。私も創部の頃のメンバーで尊敬する土岐高史さんからの話し、なんとか責めを果さねばならない。遠い記憶の中から当時の懐かしいメンバーの名前を思い起す。土岐さんをはじめ、志村正二郎、内野孝治、片山不二臣、中川桂次、秋岡武承、関彦太、本領泰弘、西尾定夫、梶川博司の同期の諸兄といつもGKを勤めた城戸昌夫君、そして高村真司、横山修、寺田格郎、横山千穂、山領健二等後輩の諸君等であった。また後輩の中で不思議と柿沼利昭君のことを思い出す。小柄で細身の身体ながらよく動きまわる頭のよい子がいた。

昭和21年、22年の頃である。

昭和21年といえば、その年の2月21日早暁、吾が十中は、火災に遭って校舎の大半を失った。私は学校のすぐ近くに住んでいたもので、直ちに駆けつけた。そこで私が見たのは、学校に寝泊りされていた生物の上島周藏先生の阿修羅のような形相で必死に消火に動きまわる姿であった。先生は防火壁をなんとか降ろそうとされたが、うまく運ばれなかったことが、無念なことだったと泣いて悔まれておられた。先生はこの火災でご自分の持物を一切焼失されてしまったのであった。今思うに、このときのことが私にとって自我の目覚めのときになった。私の心の中に生涯、敬愛、思慕する先生の像が定着するとともに、今まで何事にも消極的で内向的だった私は、あらゆるものについて、興味と関心をもって積極的な生き方をするようになった。やがて始まった校舎の再建の槌音を聞きながら、それでも不自由な学校生活が続く中で、運動についても、勉学についても、今までとは全く違った新しい自分の幕開けが始まった。

やがて上島先生がサッカー（当時は蹴球と呼んだ）を指導することになられて、私も喜んで

参加することになった。ときに試合があるときは、私はいつも当時の後衛のフルバックを勤めたが、気持はすごくあっても性来不器用で運動神経など極めて乏しかったので、さぞみんなに頼りない思いをさせたに違いない。事実、私は今でもよく覚えているが、たかがボールを蹴るスポーツといっても、グラウンドを駆けまわる体力は相当なもので、当時極めて身体がキャシャだった私には、最後まで勤めあげるには容易でないスポーツという思いが強かった。それでも人数不足のことが多く、きまって駆り出されたり、また上島先生が現れると、「セキ、バックに入れ」と大きな聲を掛けられた。先生は私を鍛えようとされたに違いないが、残念ながら期待に応えられた実績はなに一つなかった。

昭和22年6月に上島先生は十中を去られて長野に帰任され、現地の校長になられた。

一方、そのころ私には、勉学や文化面への関心が強くなっていった。勉学については、各科目とも、最高の先生方によって存分に最高の授業が行なわれた。事実私は、生涯においてあるとき程一生懸命に勉強に打込んだことはない。また、校友会各文化部も続々誕生し、私は上妻精君を中心とした文化科学研究会や図書部に所属し、更に同君が中心ともなった自治会の組織化にも頭を突込み、昭和22年秋上妻君が全校自治委員長になると、私は指導部長になり、翌年には私がその後を継いだりして、大学での学生運動参画への道を歩んだ。

昭和21年から24年にかけて私の自我の目覚めは、また読書への開眼でもあった。この期間に読んだ図書は数えきれない。丁度親しい友に松井博光（ひろみ）君という最後の旧制一高に入学した秀才がいた。彼の長兄がまた一高の秀才で岩波文庫を全部所持されていた。当時手に入ることが全く困難であったこれらの書は、松井君から借りて読んだものである。乱読もいろいろ、寝るのも惜しんで夢中で読んだものだ。漱石に沈潜し、ジャンクリストフに人生への勇気を鼓舞されたのもその一端だった。

昭和24年の秋西高の記念祭でOB・現役の試合があり、私はOBとして参加し、不覚にも右足を骨折し、浪人もせずに折角入学した大学を1年休学する羽目になった。爾来足の調子もままならず、その後サッカーは一切やめてしまった。しかし、東大に入って何人かの親友が、高校（中学）時代サッカーの名選手であったことが分り、僕も少しやったヨということになった。また東大は、なぜかサッカーが強かった。私は誘われてよく東大のサッカーを観戦した。

私はスポーツの中では、サッカーが一番好きである。ボールの行方で状況がしょっちゅう変わる。有利と書いていても一転劣勢に立たされる。この逆も然り。勝負は最後まで分らない。あの最後のロスタイムによく点が入るのは何故であろうか。決して、最後まで諦めることはないのである。手を使わず足だけの、そしてヘディングの妙、時に見事な技術が、技能がある。そして一蹴、一頭、ゴールした時のすばらしい快感、まことに変幻自在の態様は人生の諸相と相似ている。サッカーはスマートで、その面白さは実に無限である。

西高サッカー50年、ほんとうにお目出度い。しかし、今みんなとともにお祝い出来るのは、この50年の歴史を支えてくれた人がいたことである。それは、土岐君であり、城戸君であり、寺田現会長であると思う。昨年暮12月23日西高運動場で現役・OBの試合があった。現役の対外試合を含め、いつもご案内をいただくが、こういう会に殆ど参加し、また地区の会合に参画され、リーダーシップをとってこられたのが寺田現会長である。そう、西高サッカー部の土

台を作り、基礎を固め、形を整え、部を育て発展させてくれたのは、寺田現会長であると最近泌々思う次第である。寺田君ほんとうに有難う。いくら感謝してもしきれない思いである。

(98. 1. 15記)

## 私と「西高サッカー部」

西高2期 城戸 昌夫

西高サッカー部の草創期の事を記憶をもとにして書くためには、私個人のサッカー歴を思い起こして辿らなければならない。

私が始めてサッカーを教わったのは1942年小学5年生の時である。東京蹴球団（東京第一師範学校OBチーム）のHBをしておられた綿引四郎先生がクラス担任で、体操の授業の大半はサッカーであった。当時私はクラスで一番身長が高かったのでGKをさせられることが多かったが、自分としては運動会でリレーの選手に選ばれ、走るのは早い方だったからFWをやりたかったのだが、何故か放課後も先生のシュート練習の相手でセービングキャッチを仕込まれたのを覚えている。綿引先生がGKの背番号1を作ってくださり「サッカーで1番になれ」と言われた言葉は忘れられない。この背番号1はその後ボロボロになるまで使用した。確か最後は十中4年生の時のユニフォームだったと思う。

1944年に当時の府立第十中学校に入学したが、第二次世界大戦末期で軍国主義教育下の十中にはサッカー部はなく、止むなく剣道部に籍を置くことになった。しかしそれも勤労働員が始まると2週間に1回位しか練習ができなくなってしまった。剣道部で覚えているのは同級生の上保幸夫君に「突き」と取られて稽古に出るのが怖くなって退部してしまったことである。

1945年東京大空襲の続く頃、一家が神奈川県山北町に疎開することになり、私は当時のサッカー名門校神中（関西の名門校神戸一中と並んで小田原中を関東の神中と呼んでいた）へ転校しサッカー部へ入部した。ところが、或る日突然練習中に憲兵だったか特高警察官だったかがやってきて、「敵国の運動競技蹴球（既にサッカーの名は使用を禁止されていた）をやるとは何事か」と、ゴールを撤去されボールを没収されてしまい、練習禁止、コーチは始末書処分、部長の先生（英語科教師）は退職させられてしまった。その時の事は上級生と共に悔し泣きをしたので忘れられない。やがてその年の夏に終戦、元サッカー部員が集まり練習を始めようということになったが、ゴールはなく、ましてボールは物資不足の折から入手し難く、誰かがバスケットボールを持って来て1個のボールを20人位で蹴った記憶がある。

1946年1月（中2の3学期）より十中へ復学した時、校庭の霜どけのコンディションの悪い中で中3の数名がボールを蹴っているのを見かけた。十中にもサッカー部が出来たのかと、入部する気になったが最初は3年生の蹴るのを黙って見ていた。

戦災を免れた十中の校舎が焼けた頃だったと記憶しているが、或る日の夕方サークルキックをしているのを見ていた私の足元にボールが転がってきて、それを手でキャッチしてドロップキックでサークルへ戻したのが、私の十中での初めてのボールキックであった。その時、3年

生に（どなたかは記憶していないが）入部を勧誘され、1946年の4月に正式に入部した。復学してから3ヶ月間入部を見合せた理由ははっきりしていないが、多分、多少なりともサッカーを経験していた中学生の生意気な気持ちからだだったと思う。薄らいだ記憶では、私が入部する前はGKを西尾さんがやっていて、西尾さんとGKのプレイについて何か言い合ったことがあるのと、2期生と一緒に入部する仲間を探していたことが理由といえ理由である。その後2期生で入部したのは、やはり疎開先の中学校でサッカーをしていた石川雅巳君（彼のスナップの効いたインステップキックは飛距離が延び、正確なキックだったのでGKとしては、是非FBとして迎えたかったので私が勧誘した覚えがある）、FWの高村真司君、横山修君、HBの久永勝一郎君（彼は後にタッチフットボール部へも入部した）、同じくHBの田中宏君であるが、高3の卒業時まで残っていたのは、高村、横山、田中、城戸の四名であった。

十中蹴球部が部としてゲームが出来るようになり、東京都中体連蹴球部に加盟したのは1947年で、加盟時は3部のBグループに所属した。加盟手続の折、上島周蔵先生は既に退職されており、体育科の平山清太郎先生に蹴球部長をお願いし届出を済ませた。1期の片山不二臣さんと二人で都立二中（立川高校）の中体連蹴球部長松浦利夫先生の所へ伺った時のことが思い出される。（後に私は松浦先生のお口添えで教育大蹴球部に入部することになった）。1947年度の戦績記録は残っていないが、3部Bで優勝して1948年度は3部Aに昇格した。3部Aの成績については1期中川桂次さんが記録を持っておられるが（土岐高史さんの記事参照）、この年に学制改革が行われ、旧制中学校は新制高等学校となり都立十中は都立十高となり中学4年生は高校2年生、5年生は3年生に編入学という措置がとられたので、中体連蹴球部も高体連蹴球部にスライドしたものとされる。中川さんの記録によると、この年3部Aで優勝した十高の唯一の失点記録が対三商戦の2-1の時となっているが、GKの私の記憶ではリーグ戦で失点したのは対両国高（旧三中）戦で、それも雨の中の試合で泥まみれのボールをミスキャッチした後に押し込まれたと覚えている。この時まで私は眼鏡をかけて試合をしていたが、この失点后特に雨中戦では眼鏡をはずすよう心掛けるようにしたので覚えている。あるいは中川さんの記録の三商とあるのは三高の誤りかも知れない。それなら私の記憶と一致する。

翌1949年度は十高も西高と改められ新しい部員も増えて創部以来最強のチームとなり、2部で優勝した年である。手元に記録がないのではっきりしたことは分らないが、リーグ戦以外で1部校と対戦したことも何回かあったと思う。というのは大学へ進んでからの対戦相手チームに1部校出身者がいて、高校時代に対戦したことが話題になったことがある。特にFW経験者は相手チームのGKのことを忘れないらしい。

1950年3月、2期生は1部昇格のおみやげを残して西高サッカー部を卒業したが、入部以来3部B優勝、3部A優勝、2部優勝と上昇の一途を辿ってきたサッカー部に在籍していたことは本当に幸せだったと思っている。卒業後のサッカー人生でも、大学新人戦優勝、関東大学リーグ優勝、全国大学王座決定戦優勝、全日本選手権大会優勝、国体教員チーム戦準優勝と、優勝街道をひた走って来たが、西高サッカー部時代の労苦がその後の人生を方向付けたことは否めない事実である。

1950年3月、私は東京教育大学合格発表の日に蹴球部に入部し、3月末から4月始めにか

けて伊豆蓮台寺に於ける春の合宿に参加した。因みに入学手続きは合宿から帰ってから行ったことを覚えている。呑気な時代であった。1950年の教育大蹴球部のGKの状況が、私の西高サッカー部のコーチを担当するに至った経緯と関係があるので記しておく。

1947年から1949年までGKを務めた稲元章先輩が卒業し1950年度の教育大にはGKがいなくなることを予測して、教育大は教育大付属高のGKをしていた村岡博人君と都立北園高のGKだった仲沢政雄君と私の3人を獲得した（これは後に分かったことだが、高体連蹴球部の役員をしておられた、松浦利夫（都立立川高）、多和健雄（都立大泉高校）の両氏が教育大に働きかけてくださっていたのである）。村岡君は都大会優勝校のGKだったので文句なしにレギュラーメンバーに決まった。更に教育大送球部（当時は11人制のハンドボールが屋外グラウンド行われていた）も亦GKがおらず、サッカー部GKサブの私と仲沢君の二人のうちの一人がレンタルで送球部のリーグ戦に出場することになった。ところが、仲沢君は農学部の学生で体育学部の練習場に通うのが無理という理由で、私が一年間のレンタルで送球部に出向することに決まった。同じGKとはいえ手を使ってはいけないサッカーと足を使ってはいけないハンドボールでは、ボールの大きさ、感覚、技術も違い、私としてはあくまでもサッカーを続けたかったのでハンドボールのリーグ戦中は練習に出たが、その他の練習はサボることにして、西高へ行ってサッカーのボール感覚を忘れないためにコーチを務めた次第である。その上、都合の良いことが起きたのは、高3の時の担任の杉村保先生が結核で入院され、その留守宅（日の出屋の裏にあった）の用心棒として先生宅を宿として通学することになった。西高とは目と鼻の先である。そんな理由で私は1950年度の西高サッカー部コーチを引き受けることが出来た次第である。

申し訳ないことだが、どんな指導をしたのか全く覚えていない。後輩諸君が「鬼の城戸コーチ」という表現をしていることからすると、かなりの厳しさを持って臨んだことは間違いないと思う。しかし事実が証明していることは、3部優勝2部優勝と順調に発展し入替え戦にも勝って1部に昇格した年の戦績が振るわなかったということは、あまり理にかなった指導をしていなかったのだと思う。公式戦参加以来優勝街道を走って来た西高サッカー部のスタイルは、旧東京高校・東京大学型の指導下にあったのが、私の教育大型（一昔前のキックアンドラッシュ型）に転じたからというより、私の指導力が乏しかったからだと反省している。当時は東大型サッカーが主流で、日本サッカー界の中心は東大OBが占めていた。1940年代の日本蹴球協会理事長竹腰重丸氏は東大蹴球部主将をしていた方で、1930年代後半に既に全員攻撃、全員守備のサッカースタイルを提唱した方である。次期理事長になられた篠島秀雄氏も、東京高校、東大で主将を務めた方で戦後始めて（1953年）、大学選抜チームの西ドイツ派遣、名コーチ、クラマー氏の招聘（1959年）に力を尽された方である。

私が西高サッカー部のコーチをしたのは8期生までで、その後は3期生の寺田君が永年に涉って面倒を見てくれた。寺田君の記事にもあるように「あとの指導者を決めるまではお前が責任持ってやれ」といってプレッシャーをかけたことは覚えているが、寺田君はよく続けてくれた。西高サッカー部が今日まで発展してきたのは寺田君の力であることを忘れてはならない。寺田君の記事の中に私が教育大でCFをしているとあるので思い出したが、あれは確か1952年

の第32回全日本蹴球選手権大会（於：静岡県藤枝市）の予選突破の時の話だと思う。対戦相手は駿台クラブ（明治大学OB現役混成チーム）だった。この試合に勝てば本大会出場が決まるという試合でCFが負傷のため欠場と決まり、GKと一番対面するCFの動きを理解しているのはお前だからということで代行をした。雨中の試合でGKの弱点を知っていた私にとって絶好のチャンスがおとずれ、1-0で勝利を得て本大会出場となったことを思い出す。当時はまだコンタクトレンズがなく眼鏡をして試合をして目の上を2~3針縫う傷をしたため、本大会はベンチに入っていた。その後、私が教育大でGKとして出場した試合はほんの2~3試合で、OBチームで数回GKをしたが最後の公式戦出場は1954年の静岡国体の教員チームで準優勝をした時で終わっている。

（追記）この記念誌の初校を終り、編集後記を書き終えてほっとしたので、部屋の片付けをしていたら、埃にまみれた一冊のノートが本棚の裏から出てきた。1949年の日記帖である。日記といっても毎日書いたものではなく暇な日に書いた手記であるが、その中に西高蹴球部に関わることも所々に記されている。西高サッカー部草創期の頃を知る縁になると思うので、拾い書きをしてみる。記されている試合の結果は、対外試合の記録の表に追加挿入する。



1月3日 十中OB・3年生混成チームと次年度現役チームの試合をして3-1で勝つ（現役が勝つほど強くなっていた）。試合の前にボールの修理に費やした時間2時間。しかも使用に耐えられるボールはたったの1個とは情けない（誰かの記事にもあったが、当時はボールのチューブのパンク直しや、外皮の穴の継ぎ接ぎを、当番を決めて行っていた）。

1月17日 始業式。冬休みの練習は10~15日の午後で、午前は3年生のみが授業を受ける。コーチの福田重信氏が来られた（福田氏は旧制東京高校の黒田尚氏の先輩だったと思う）。

2月5日 予定していた対東京高校戦も対OB戦も人数が揃わずお流れとなる。小生練習に参加せず買物に行く。ボールネット2、ニードル1、口紐1、スコアブック1で180円。以前はボラれていたのか270円だった。90円の差は大きい。（別の記録にチューブ280円、外皮1,200円、スパイク2,700円〈安田で2,000円の品〉とある）。

3月20日 バックルとバッジができたという知らせがあり、神保町の徳富商会へ行く。5,500円を支払ってからよく見るとSoccerの文字がSATUKAとなっている。合宿で皆に配ると約束していたのに……。作り直しが完成するのは4月10日という（スポーツメダルの専門店ですえサッカーのスペルを間違えるほど、サッカーは知名度の低いスポーツだった）。

3月25日（戸塚合宿第4日）お寺の好意で風呂を使わせて貰えたが、薪代をどう捻出したらよいかわからない。

3月26日（合宿第5日）練習を休んで一日中野菜を探がし歩く。安い野菜は買えなかったが夕方、原小学校の校長先生のお宅を訪問し、不足分のお米を補うための麦を供出価額で分けて頂くことができた。これも土岐さんのお母さんの声がかかっていたからであり、大変嬉しい。

4月8日 第4回対オタマジャクシ戦（旧制東京高校蹴球部のことを何故かオタマジャクシと呼んでいた）の後、高村、横山、田辺、横倉、小松、中島と7人で吉祥寺へ出る。各々、中華そば1、大福4、みつ豆1、しるこ1、ココア1を食べ歩く。合計1,180円を支払う。これで

春休中のアルバイト代は120円を残すのみとなる。

4月11日 予算会議に出席。64,125円要求。マネージャーとしては合宿費の借金（OBの土岐さんから借用）を返済するためにも頑張らねばならない。

4月27日 予算会議で蹴球部は42,000円と決定。サッカー29,000円、タッチフットボール13,000円の出すがどこまで押し通せるか心配だ。

5月4日 タッチフットの植木君との交渉の結果、サッカー26,000円、タッチフット16,000円で決着。今年度はビクターが2~3個買えるかも知れない（通常1,400円のボールを使用していたが、外皮が延びていびつになることが多く、2,000円のミクニのビクターは高嶺の花だった）。これを祝して（当時の校友会予算からこれだけの額を獲得できたということは祝う価値があった。因みに私が所属していた地理研が獲得した予算額は8,200円だった）、高村、横山、石川、寺田と5人で吉祥寺へ出る。中華そば1、大福3、おはぎ1、しるこ1、アイスクリーム1を食べ歩いた。855円を支払う。（4月8日にも書いているように、下校途中で空腹を満たしながら部員のチームワーク？をはかることがあった。練習の後で“日の出屋”で買っておいしたコッペパンを噛りながら暗くなるまで語りあうこともあった）。

5月9日 土岐先輩と深川さん（東京高校蹴球部の土岐さんの先輩）のお宅へ伺い、ゴールネット購入費2,500円、チューブ11枚、外皮10枚を贈り物として頂戴する。これも土岐さんのお陰で皆で感謝しなければならない。これで東京高校からお借りしていたボールを返却することができる。

6月22日 今夏も合宿をしたいが、合宿所がなかなか見つからない。それよりも7・8月分の授業料（900円）が納入できそうもないから、アルバイトのため練習を休むという部員を参加費免除で参加させる方法はないかと思う。夜、黒さんの所へ相談に行ったが、大学受験の話で終わってしまった。（当時、私は児童愛護学生連盟でアルバイト〈主として街頭に出て紙芝居をして子どもたちを補導する仕事〉をして半日で200~250円の収入を得ていたが、そのほとんどはサッカー部のために使っていた。このアルバイトは後に西高に児童文化研究部をつくる切っ掛けとなり、大学進学後も民生局と協力して浮浪児補導に当たることとなった）。

6月26日 サッカー部（この頃から蹴球部という名称がサッカー部に変えられたらしく、日記でもそうになっている）のコンパで現役16人、OB4人が集る。11時半に帰宅したが、二次会参加の者たちは終電車に乗れたのか心配だ。こちらも帰宅したらバッグの中のバックル4個、バッジ6個の入っていた紙袋が紛失しているのに気が付いた。何時何処で失くしたのだろう。1,280円の損失。合宿費の立替分と併せると、1,880円の赤字である。明日から期末試験まで紙芝居だ。

7月10日 明後日から期末試験だが、合宿地が未だ決まらない。小田原高校の長英さん（鈴木長英先生は私が神中蹴球部在籍当時の部長の先生で、後に北大の教授となられた方）にお願いに行く。小田原高校は8月上旬は使用可能だったが、適当な宿泊所が見つからず諦めて帰る。

7月11日 合宿候補地として、菅平、土浦、藤岡、国府津、伊豆大島への手配終る。

7月19日 合宿候補地よりの返事。全て何等かの支障あり、決定しかねる。

7月31日 今夏の合宿地決定。宿泊所は文部省伊香保保養所で8月7日~10日まで、11日~14日は練習場の伊香保小学校の教室を借りることになるらしい。問題点は申し込み書に記入す

る責任者名は文部省関係者でなければならないということだ。(寺田君の記事にもあるように私がアズマヒロシという名前で申し込んだが、東洋先生は後に北大教授となられた方である)。  
 8月28日 練習日5日目で初めて部員全員が出席。この暑さではサボり心が出ては仕方がないかもしれないが、コーチの村瀬さん、藤田さん、岡田さん(東京高校蹴球部)にやっと面目がたつ。

9月4日 国体予選で成城学園に4-0で勝つ。しかし豊多摩は足立に6-0、小石川は小山台に11-0で勝利。我々は豊多摩や小石川のレベルに程遠いのか?リーグ戦開幕まであと1ヶ月というのにフォワードの得点能力が低すぎる。(別の記録に1947年度は得点23、失点12。1948年度は得点31、失点14。1949年度は得点45、失点10。3年間の試合数51、得点99、失点36。とある)。

10月9日 第1回復興蹴球祭が武蔵野競技場で行われた。北園2-0小石川、立大2-1東大、東京クラブ3-2湘南クラブ、三共製菓4-2第一生命(此の年の高校、大学、クラブ、実業団の最強チームの試合だった。北園高校はこの試合に勝って国体の東京都代表となった)。

10月31日 第4回国民体育大会が武蔵野競技場で行われ、2年生全員が開会式にプラカード係として参加。炬火隊員にも数名が選ばれた。関西高校の練習場として我が校の運動場・体育館を開放。

11月26日 北園高で行われた東京都高体連蹴球部リーグ戦優勝杯授与式に参列。全国高体連蹴球部長の飯村進先生(北園)、東京都高体連蹴球部長の松浦利夫先生(立川)、副部長の多和健雄先生(大泉)の前で平山先生に「十高の馬鹿共が一応優勝した」と言われ、憤慨して部員に報告したら、後日関さんに「馬鹿は馬鹿でも蹴球馬鹿ならいいじゃないか」とたしなめられた。(この後、私の日記にサッカー部のことが記述されていないので多分この頃から引退して受験勉強を始めたのだと思う)。

< 現役の諸君へ!! >

1954年以后私は西高サッカー部とも遠ざかってしまい申し訳ないと思っているが、40年間の教員生活を終えた今、高等学校サッカー部とOBの関係は、1(現役)+1(OB)=2の関係ではなく、1×1=1の関係でなければならないと思っている。即ち、1×0でも0×1でも0になってしまうということである。幸い西高サッカー部もOB会も0ではない今、この記念誌をOBの思い出話に留めたくないの、現役諸君にも是非読んで貰いたいと願っている。現役諸君もやがてOBとなり、現役の指導に当たる者も出てくるだろう。否、1×1の関係を保っていくために現役指導に当たってくれるOBが大勢出てくれることを願っている。

日本のサッカーのレベルが向上してきた現在、典型的な進学校のサッカー部の衰退が、あちこちで見られるようになった。それは当然のことといえばそれまでであるが、西高サッカー部は優勝を目指すサッカー部になれなくても、40期の土屋潤二君のいうように、人生の中で何かの方向付けとなる精神性の高揚を目指すサッカー部になれば良いと思っている。西高を卒業した後でサッカー部に在籍していて良かったなあと思い起こすことの出来る、西高サッカー部を育てて行って欲しいと願っている。

私は大学卒業後40年間教職にあったが、学校という職場では一人一人が専門の分野で教えていても、常にチームワークを必要とし、特に他のスポーツとは違ったサッカーのチームワーク、即ち輪のチームワークで臨むことが要求された。他の企業体でもそうだと思うが、集団の能率を最大限にまで高めるためにピラミッド型の組織で当たると、管理型には適しているが機動性が乏しくなったり、個人の専門の能力が十分発揮できなかったり、上役の顔色を見ながら仕事をする習慣になると思う。リング型の組織で校長(社長)から平教員(平社員)までが、輪になってつながっている状態だと、そのユニットは一人一人の教員(社員)ではあるが、これが夫々の場で責任を持って仕事をすることによって、はじめて輪がつながり組織が成り立っていくのだと思う。サッカーはそれを教えてくれ、それを実践する力を与えてくれた。私は学校で教頭や主事の仕事をしていた時、サッカーをやっていて良かったなあとと思うことが屡々あった。現役諸君もサッカーをやることで、何かを学ばれることを期待している。



2部リーグ戦優勝記念写真 昭和25年1月25日撮影

リーグ戦出場メンバー	}	GK 城戸(3年)	LH 寺田(2年)
		〃 木暮(2年)	〃 山領(2年)
		RB 名出(2年)	RW 田辺(2年)
		〃 小畑(1年)	RI 高村(3年)
		LB 田中(3年)	CF 中島(2年)
		RH 横倉(2年)	LI 横山(3年)
		CH 小松(2年)	LW 中村(2年)

## 私の西高サッカー部

西高2期 高村 真司

### 1. 西高サッカーとの付き合い

サッカーを始めたのがいつで、どういうキッカケかははっきりしない。最初の日は暗くなるまで走りづめで、家に帰ったら貧血気味で頭が痛く、はき気がして大変だったことが思い出される。最近の知識によればこれは脱水症状であったと思われる。

その頃は靴が貴重品であった。だからはだして蹴っていた。折角配給された運動靴もボールを蹴ると直ぐに底がパッキリ割れてしまい情けない思いをした。その位当時のゴムは質が悪かった。

はだして蹴るのは良いキックが出来た時は気持が良いが、正直なところ痛いし怖かった。ボールもツギハギだらけで、皮は伸び、いびつなデッカクな無様なものだった。従って真直ぐ飛ばずにゆらゆらゆらいで飛んで行く。そしてヘディングすると接いだ皮の形がおデコに残るという状況で今の人には想像も出来ないだろう。それでも貴重品なので皆で繕って使っていた。

部に入ったのはたぶん十中3年のときだったと思う。部長は上島先生で当時、学校で生活されて居られた。

当時の部員に誰が居られたかは定かでない(部員でない人も一緒に蹴っていた)。

十中4年(昭和22年)の頃から部の体制もしっかりして来て、指導体制も土岐先輩のお骨折りで(旧制)東京高校の黒田氏をはじめとする皆さんにお願い、日常の練習だけでなく、強化合宿のご指導を頂くなど本格的な部活動になっていった。そしてこの年からリーグ戦(3部)に加入し対外活動が始まった。

翌年は学制が変わり、十高2年となったが、この年は3部リーグで優勝。更に翌年、西高3年の時2部リーグで優勝という成果を挙げて卒業できたのは本当に幸せであった。

多くの先輩方が築いた基盤のもとにチーム一丸となって努力した賜である。私にとっての上もない楽しい思い出を作ってくれた先輩そしてチームメイトの皆さんに心から感謝申し上げる。

### 2. OB会のこと

卒業した直後は浪人していたこともあって、西高に来てボールを蹴らして貰っていたし、夏合宿にも参加し、正月の豊多摩との定期戦には必ず出席していたが、就職して地方勤務となった頃から西高とのつながりが薄くなり、僅かに格さん(寺田君)からの連絡で後輩の動静を訊くに過ぎない時期が続いた。声がかかっても仲々ゲームには参加出来ず、そのうちにボールを蹴るための筋肉がなくなってしまった(勤め先でもサッカー部の部長をやったりしていて、ダッシュと小技ではまだ負けないが、息が続かないのと大きなキックが出来なくなった)。当然参加は夜の部だけになった。

そして今回50周年を迎えて、改めて小生の寄与度を振り返ってみると、最初の良いとこだけのつまみ食いではないかと反省の念にかられる。

しかし短い間であったがサッカーに熱中しそれなりの結果を出したということは、私の人生にとって大きな支えになっている。今でこそサッカーで国中が大騒ぎしているが、無名に近いスポーツを愛し、夢中になってやったことは誇りに思う。

後輩の面倒を十分みられなかったのは申し訳ないが今後に向けて何かお手伝い出来ることがあればさせて貰います。

### 3. トピックス

#### (1) 2部優勝のこと

2部6チームのうち3強は西高、慶應、立川だった。

立川に3-0で勝ち、最終戦も慶應に3-0で勝った。両試合とも開始早々に私のアシストを中島君が押し込んだのが勝利につながった。2点目はいずれも小生のシュートだったが、立川戦ではセンターサークル辺りから蹴ったのが、相手キーパーの油断と西日を受けて見にくかったためか、直接ゴールしたのを今でも思い出す。

#### (2) 当時の日本サッカー

当時の日本サッカー界の中心は大学とそのOBで作ったクラブチーム。日本選手権に相当する大会はWMW(全早大)、BRB(全慶大)、東大LBなどが上位にいた。選手としては二宮、加納兄弟、加茂3兄弟などが活躍していた。対外試合はまだなく、たまに米軍の艦(UNICORN)が着いて、その艦のサッカーチームと後楽園球場で対戦したのを観戦したのを覚えている。

杉並サッカークラブは福島玄一氏(後に国際審判員)が中心となり、全日本のメンバーも何人か居られた。昭和25年5月の憲法大会には、西高OBとしては小生と寺田君が出場、優勝した。

その位のレベルだったのかも知れない。

#### (3) 先輩・後輩のこと

創立当時の先輩については寺田君が詳しく書いているのでそちらにゆずるとして、同じ釜の飯を食った仲間は単なる同窓生とは違った絆で結ばれている。

最近なぜか私の周囲にも〇〇西高会なるものが幾つかあって旧交を温めているが、妙によそよそしい。話題は当時の先生方のあだ名から始まって、昔話が続く、そして年とともに病気の話になって行く。

先輩、後輩のつながりが過去をふり返るのではなく未来に向けての情報交換、意見交換となるようにしたいものだ。

### 4. ワールド・カップ

今年はワールド・カップに出場できるようになった。

Jリーグの創設が日本サッカーのレベルアップになったことは間違いない。外人依存の体質は残念だが、面白い試合をもっともっと見せ、スタジアムが常に一杯になることがサッカー界の人気の維持には必要だ。

チーム数を増やせば増やすほど一試合当りの観客動員数は減るのはやむを得ない。それを喰い止めるのはサッカー籤ではなく試合の内容だ。

日本代表の選手の決定には日本的ニュアンスが付き纏うが、選ばれた人は頑張るって欲しい。ベテランも必要だが体力に劣る日本としては若手の運動量のある方が良いのだろう。

この間、あるコーチの話聞いたが、日本選手はすぐに外人選手に合わせてしまうので日本の特徴あるサッカーが作れないと云っていた。サッカーは格闘技である。外人選手は勝ちにこだわり、ずるい（審判の目の届かないところでは平気で反則をやる）。

その点、日本の若手選手は過保護に育てているし、生活がかかっていない。プロの域には達していない。それを助長するのが、マスコミだ。

2002年は主催国として出場出来る訳だが、真に強いチームになることを祈る。

## 5. 雑感

知名度の低いスポーツに携った者として、今の隆盛は感無量である。今でも若さを保てられるのはサッカーのお陰である。無口で話し下手でキカン坊だった私が、多少なりと人様の前で偉そうな事を云えるようになったのは、目標に向かって努力したこと、そしてチームを率いて勝った事による自信が私を育てたと思う。

私は会社の若手の育成に際して常にこのことを云っている。

日本経済が不況に遭遇しているが、日本の力がなくなった訳ではない。自信を持って新時代に対処しよう。

(98.5記)



昭和24年10月23日  
記念祭の日に

当時のユニフォームは自前のシャツに赤線を3本つけて左胸に十高と入れていた。ストッキングだけはえび茶に白の折り返しのものをそろえていた。



昭和25年1月8日  
2期生の卒業記念撮影

## 西高通学50年

西高3期 寺田 格郎

私たちが現役のところは旧制東京高校サッカー部の方々の指導を受けた。コーチとしては黒田尚次さんが最初である。それ以前に黒田さんの先輩に当たる福田さんや旧制一高OBの村瀬さんに指導をしていただいたこともある。東京高校も一高も東大に入った彼らの先輩たちの指導を受けていたから、私たちが教わる基本は東大サッカー部の練習と同じような内容だった。当時はサッカーといえば東大、といわれるように東大は強かったし全日本代表に多くの選手を輩出していた。もちろん早慶明などにも名選手がいたので高校時代は大学リーグを観に行き彼らのプレイに注目したものだとし、国体予選や各種の選手権大会などではベルリンオリンピック代表だった選手の技を堪能することもできた。

黒田さんのコーチは西高1期から3期にかけてだったが、名古屋大に進学されてからは合宿に顔を出して下さる程度になった。それ以来、西高サッカー部はOBの指導で育ってきたといえる。進学して体得した大学サッカーの息吹を母校に伝えるOBが誕生したからで、当時は大学サッカーの練習方法や技術が日本のサッカーの先端だった。日本がドイツからクラマー氏を招いたのは数年あとの話だ（1959年のこと）。

西高が旧制東京高校の指導を受けたのは十中7期卒（1期と同期）の土岐・秋岡両先輩が東京高校に進学したからである。次いで1期の関彦太さんが東大工学部に、2期の城戸昌夫さんが教育大の体育学部に入った。西高ではGK専門だった城戸さんが教育大ではCFとして雨中の試合で怪我を負いながらも活躍したという輝かしい話を御当人から聞いて、私は心弾むものがあった。進学してもサッカー部に入らなかったOBや浪人OBも西高に来て後輩を指導して下さった。現役の面倒はOBがみるといったようなOB意識だが、西高にサッカー専門の指導をなさる先生がおられなかったのも一つの理由でもあろう。

私は早大でサッカー部には入らなかった。東伏見のグラウンドに毎日通わなければならないし、文学部ではあるものの授業との兼ね合いや経済的な理由もあった。でもサッカーは続けたいので地元の杉並サッカークラブに入った。杉並クラブは日本協会の役員で荻窪駅近くの歯科医の福島玄一氏が主催していたので一人でお宅を訪ねてみた。昭和26年4月のことで、福島さんは見ず知らずの私の訪問にもかかわらず快くクラブに入れて下さった。高山英華、二宮泰、松浦巖、則武謙、竹島弘、松永碩といった全日本代表クラスの選手が杉並区にはごろごろ住んでいたから高校を出たばかりの私はそのような方々と一緒にサッカーをしていると自分まで上手くなったような気がした。早大理工学部で勉強一途の1年先輩の高村真司さんも杉並クラブにお誘いした。彼は華麗なシュートを放つゴールゲッターだった。私たちは杉並クラブを中心とした区の代表にも選ばれて都民大会に出場し何回か優勝している。いずれの区にも一流選手が出ていたので私は往年の名選手高橋英辰、加納孝さんらに振り回された思い出もある。当時の都民大会は選手の資格を限るようなこともなかった。私たちのあとも杉並区の代表となって活